

漫画原作シナリオ  
『銀河のトイレ職人』

アヤガシムホ

■ 荒廃した町（20年前）

倒壊した建物、くすんだ空。

■ 同・ボロのようなテント内

汚れた子ども達が、すし詰め状態。

その端で、横たわっている9歳の少年、

すきのはとおか

杉葉十日。

痩せ細り、息も絶え絶え。

傍らに座る少女、とうじょうたかの東條高乃 も心配そう。

高乃「（泣いて）十日、死んじややだよ」

杉葉「高乃……僕は大丈夫……だから……」

突然テントの入り口が開いた。

眩い光と共に、大柄な男が入って来る。

男、ウツサは颯爽と杉葉の方へ。

ウツサ「こりやあ酷い衛生状態だな……なに、

すぐに俺が綺麗にしてやるからな」

杉葉、高乃、不思議そうにウツサを見て。

杉葉「おじさん、誰……？」

ウツサ、後光のような光を背に。

ウツサ「しがないトイレ職人さ」

■ 宇宙空間（現在）

T『二十年後』

煌めく星々、広大な銀河。

ぼつりと浮かぶ地球周辺を、円盤型、ロ

ケット型、ボール型と、様々な宇宙船

が飛び交っている。

■ 地球・マンハッタン島

薄曇りの下、傾いている自由の女神。

奇妙な外観の異星人達が歩き、楽しそう

に自由の女神を眺めている。

T『天の川銀河の外から様々な異星人が地球

に訪れ、地球人もまた気軽に宇宙を旅す

ることが可能になった——『銀河旅行時代』

■ 同・ニューヨークの町中

排気を吐いて空を飛ぶ車、浮遊する屋台、

そこら中に立ち込めるスチーム。

退廃的で混沌とした町並み。

混然と歩く、地球人と異星人達。

スーツに身を包んだ高乃（29）が、ビー

ム状のフラッグを持って語っている。

高乃「ニューヨークは、長く戦争状態にあつたヒガン星人の攻撃で壊滅的な被害を受けたながらも、奇跡的な復興を遂げました」

高乃が話しているのは、三人の異星人。

ラバー素材の全身スーツを着ている、地球人によく似た銀髪の男、パテル。

4mはありそうな巨体の岩男、ボルダナ。鳥のような頭と嘴、鱗の肌を持つ男ドリユー。

高乃の話にちゃんと耳を傾けているのはパテルだけで、ボルダナは地球の女性をイヤらしい目で眺め、ドリユーは見るもの全てに目移りしている。

高乃「もー、聞いてやしない……」

パテル「太陽系屈指の旅行会社、セレスティ

アルの添乗員ツァーリーダーも楽しやないですね」

高乃「いいいえーパテルさんみたいにお行儀がいい他星観光客もいますから、たまには」

ボルダナ、巨大な手で通りがかりの女性の前を遮って。

ボルダナ「姉ちゃん、ダナ星人と酒でもどうだい？ 絶品のオイル酒をな！」

女性「（怯えて）え、遠慮しときます……！！」

高乃「ちよつとボルダナさん！ 困ります！」

ボルダナ「（女性を逃がし）へいへい」

ドリユーは何故か、中華風の浮遊屋台から出ている煙突に興味津々。

高乃「ドリユーさんも！ ガルアン星のイメージ悪くなっちゃいますよっ！」

ドリユー「失敬ナ！ 俺はコカ星出身ダ！」

高乃「（頭を下げて）あ！ す、すみません！ 似てるのでうっかり」

パテル「（苦笑）鳥類系人類、ですか。似ているからと言って混同はいけませんよ」

高乃、誤魔化すように笑う。

#### ■高級ホテル・一階ロビー（夜）

ヨーロッパアンで豪華な内装に、落ちついた雰囲気。

パテル達を引き連れ、高乃が入ってくる。

高乃が手を振ると、ビームフラッグが手元に収納。

高乃「こちらが本日ご宿泊していただくホテルです！」

パテル「うん、美しいホテルですね」  
ボルダナ「（肩をいからせ）まあまあだな」  
ドリーユ「面白味の無い臭いダ」

高乃、中を観察しているパテル達を背に、フロントの受付嬢の方へ。

高乃「セレスティアル社のツアー一行ですが」  
受付「はい、少々お待ち下さいませ」  
一息ついて、ふと横を見る高乃。

高乃「……!?!」

視線の先——廊下奥、トイレの入り口前。黒髪眼鏡に白衣姿、腰からしっぽのようにコードと差し込みプラグがぶら下がった少女ロボット、ペオが立っている。さらにトイレから、スーツ姿の凛々しい

男性——

杉葉十日（29）が出てくる。

高乃「（嫌そう）と、十日……杉葉十日！」

杉葉「実に素晴らしい内装と設備だ。このアメニティは及第点を越えるぞペオ！」

ペオ「（無感動）そうですか、マイスター」

高乃「（叫ぶ）十日っ、何してんのよ！」  
興奮する高乃に、怪訝な視線を向けるパテル達。

杉葉「ん、高乃……東條高乃じゃないか。どうしてお前がここにいる」

高乃「私は仕事よ、地球旅行の添乗員ツアーリーダー！」

杉葉「俺だって仕事だ。市場調査の一環」  
パテル「どなたです？」

高乃「（言いづらい）ええとその何というか、腐れ縁とか幼なじみとか……」

杉葉「このトイレはなかなか凄いぞ。最新式のギャラクシイ洗浄を取り入れている。他星人への配慮を怠っていない」

ボルダナ「トイレエ？」

杉葉「しかし、逆に地球人向け温水洗浄装置が少ないな。星3つにはギリギリ届かないかな……」

パテル達、呆気に取られている。

高乃「アンタのトイレうんちくなんか、誰も聞きたくないってば！」

杉葉「トイレの重要さが分からんか馬鹿が」  
ドリーユ「何なのダ、この地球人ハ……」

高乃「彼はトイレのプロなんです。銀河の全人類を満足させるトイレを設計するためのエリート技術者——」

杉葉「(堂々と)俺こそが宇宙的トイレ企業、VO社の、『トイレ・マイスター』だ！」

さらに唾然のパテル達。

ロビーの視線も集まり、赤面の高乃。

高乃(声)「厄日だわ……」

■同・最上階・レストラン(夕)

高級フレンチ的な内装、様々な異星人や地球人達が静かに食事をしている。

壁際のテーブルで食事中的高乃やパテル達、何故か杉葉も一緒。

高乃、立って料理の説明をしている。

高乃「——このように、メニューはそれぞれのお星に合わせてオーダーしております」  
夢中で食っている、ボルダナとドリーユ。  
ボルダナの前の皿には鉱石が幾つも重ねられ、ドリーユの前の皿には青々としたウメの果実や炭酸水が。

ボルダナ「ふん、チキン野郎め。ちまちましたもん喰らいやがって」  
ドリーユ「失敬ナ、お前こそ粗野甚だしイ！」

険悪な雰囲気、ため息を吐き座る高乃。  
杉葉、高乃、パテルの前にはパンや魚料理など、人間的料理。

パテルは、水ばかり飲んでる。

高乃「(杉葉に耳打ち)なんで十日までご飯食べてるの……」

杉葉「皆さんが是非にと仰ったからだ。俺としても、他星の方との食事は参考になる」

杉葉、懐から出した小さな紙包みを開き、中の塩をゆで卵にかけている。

高乃「(気味悪そう)うわ出た、マイ塩……」

杉葉「塩は不浄を祓う。不浄トイレに関わる者としての、俺なりの験担ぎだ」

高乃「食事に使うのはおかしいって」

パテル「(苦笑)全く、地球人は奇妙な仕事を作りますね。似たような外見でも我々シ

ユミ星とはまるで文化が違う」

杉葉「地球人のトイレへのこだわりは古来からのものです。メソポタミア文明の頃にはすでに下水道やトイレがあり」

高乃「(遮って)食事中なんだってば」

パテル「それで——彼女も仕事仲間ですか？」

パテルの視線の先——壁のコンセントに差し込みプラグを差し、充電中のペオ。

杉葉「こいつは……おいペオ、充電と同期を中断して、皆さんに自己紹介を」

ペオ「はい」

ペオ、プラグを抜き立ち上がる。

ペオ「(機械的に顔を向け)ペオはマイスタ

ー杉葉のアシスタント、ヒューマノイドロボットエンジニア、ペオ・ル・ba750です」

パテル「ba? その型番は確か先の星間戦争で地球軍が前線に投入した戦闘兵器……」

杉葉「よくご存知で。確かにペオは兵器として作られました、何故か視力が人間以下でして。廃棄される所を私が拾いました」

ボルダナ「兵器がトイレ職人の助手たあ、落ちぶれたな」

ペオ「そんなことはございません。ペオは与えられた仕事を誇りと認識しています」

ドリーユ「トイレ作りが、誇りだト」

ペオ「はい。人間は不便さを補うために相互に支え合うことを由とする生物です。これを手伝うことはロボットの本懐です」

満足そうに頷く杉葉。

高乃「(感心)健気でいい子ね、ペオは」

ペオ「ペオも東條高乃様に好意があります」

ペオの差し込みプラグ、喜ぶ犬のしっぽのように、左右に振れている。

高乃「(照れて)うふふ、ありがと」

杉葉「人類がロボットを生み出したのは、正にトイレのためだろうな」

高乃「んなわけあるか」

パテル、水を飲みながら苦笑している。

× × ×

レストランの窓の外、広がる美しい夜景。夜空を往来する車のライト、星空。

食事も終わり、一心地ついている高乃達。

ボルダナ「(立ち上がり)それじゃ早速、ホテルご自慢のトイレを拝ませて貰うか。おい職人、本当にいいトイレなんだろうな」

杉葉「ご心配なく、ダナ星人は優遇されている。洗浄システムも完備されていますし、

トイレの数も他より多い」

ボルダナ「（ご機嫌）ぐひひ、結構結構」

パテル「（立ち上がり）では、私もご一緒に」

ボルダナ「おい気持ち悪いぞ、男同士で」

パテル「まあまあ、良いではないですか」

並んで出ていく、ボルダナとパテル。

ドリーユ「おい……EEMとは何ダ？」

高乃「あら、ご存知無かったですか」

杉葉「『エキゾチック・エクスクレメント・

マター』——大きな声では言えませんが、

『食べて出すモノ』のことですよ」

ドリーユ「又……私は星間旅行は初めてなの

ダ。こちらノ言葉には慣れていなイ」

高乃「大仰な言い方よねえ、EEMなんて」

杉葉「そんなことは無い。人類の数が幾千万

あれば、EEMもまた幾千万」

ドリーユ「（興味深そう）ふムふム」

杉葉「地球人のEEMが肥料に使えたように、

資源利用が可能な、まだ見ぬEEMがある

はず。無限の可能性を秘めた物質です」

ドリーユ「それが、ダナが優遇される理由カ」

杉葉「ダナ星人は、鉱物やオイルを摂取して

レアメタルのEEMを出す。彼らに生活し

てもらっただけでも、資源が潤うのです」

ドリーユ「それでワンプロア丸ごとダナ星人

用なのカ、飛んだ差別ダ……（立ち上が

り）ふん、私もそのEEMとやらを出し

てくる」

ドリーユ、不機嫌そうに出ていく。

高乃「やれやれ、今回の組み合わせは最悪

だわ……もつと仲良くできないのかな」

杉葉「地球を中心としたあの戦争が終わって

からまだ二十年だ。簡単には行かないさ」

高乃「そうだ十日、このリストなんだけど」

高乃、一つのファイルを卓上に出す。

ボルダナ達の名前と出身星、EEMなど

の項目が記されている。

杉葉「（見ず）個人情報盗み見る趣味は無

い」

高乃「さっきのEEM関連の相談よ。ねえ、

このこのトイレ本当に問題無いのね？ よく

あるのよ、EEMトラブル」

杉葉「トイレ機器は俺が所属する、日本のV

○社が提供している。ホテルの案内がしつかりしていれば問題は無い」

高乃「トイレなんてどこの国でも同じでしょ」

杉葉「なめるなよ。古代日本のくみ取りは、

効率的なエネルギー備蓄システムだった。

各大名は私設のトイレを路傍に置き、後の

世では温水洗浄の普及にも……」

高乃「ご高説どうも、問題無ければいいわ」

うんざりしつつ、ファイルを閉じる高乃。

#### ■同・廊下（夜）

機嫌の良いボルダナとパテル、相変わらず落ち着きの無いドリーユを連れて歩く

高乃。

杉葉とペオも着いてくる。

ボルダナ「いやあ、なかなか良いトイレだったな」

パテル「（杉葉を見て）さすがマイスターが薦めるだけある」

杉葉「私の力ではありませんよ」

高乃「ドリーユさんは大丈夫でしたか？」

ドリーユ「（動揺）ン？ ま、まあナ……」

突然立ち止まるペオ。

プラグのコードが、アンテナのようにピンと立つ。

ペオ「警告。センサーが危険物の反応を感知」

高乃「き、危険物?!」

驚いてペオを振り返る一同。

杉葉「確かか、ペオ……」

けたたましい警報が、ホテル内に響く。

アナウンスの声「宿泊客の皆様にお知らせ致

します。ホテル内で有毒ガスと思われるも

のが発生しました。職員の案内に従い、た

だちにホテルの外へ避難して下さい」

高乃「（慌てて）どどど、毒ガス……?!」

#### ■セントラル・パーク（夜）

ライトアップされた敷地内には避難した客が集まり、騒然としている。

不安そうなパテル達と一緒に、泰然と立つ杉葉とペオ。

人混みの奥から、高乃が走ってくる。

高乃「数人が気分を悪くしただけで他に被害



は無いそうです」

杉葉「（頷き）良かった」

ボルダナ「お、おい！ どういうことだ！」

高乃「落ち着いて下さい、まだ原因も分かっていますので」

パテル「（険しい顔）しかし毒ガスとは穏

やかではありませんよ」

ドリーユ「（怯えている）……」

高乃「とにかく、今は指示をお待ち下さい」

頭上から、パトカーのサイレンが。

一同が見上げると、浮遊するパトカーのランプが夜空から降りてくる。

避ける人々の中心に、着陸するパトカー。

中から出てきたのは数人のNY市警と、

メタリックな体にコートを羽織った奇妙

な刑事、ジグ。

ジグ「静粛に諸君！ 私はNY市警88分署

の宇宙刑事ジグである！」

高乃「（小声）市警か宇宙刑事かどっちなの」

ジグ「検知された毒ガスの原因を探るため、

しばらくこの公園に諸君を拘束することにな

る！」

ボルダナ「か、勝手にそんなことを！ 星間

問題になるぞ！」

ジグ「被害の拡散を食い止めるためである！

ここ数ヶ月、テロと思われる事件が散発し

ている！ 慎重な捜査を要するのだ！」

パテル「テロだって……？」

困惑する高乃、沈黙を守る杉葉と。ペオ。

ジグ「それでは、各自所持品とアリバイのチ

ェックを受けてもらおう！」

× × ×

他の客達と共に、ジグや警官達に尋問を

受けている高乃とパテル達、杉葉と。ペオ。

ジグ、あからさまな訝りの態度でボルダ

ナと話している。

ジグ「貴様、如何にもテロを犯しそうな風体

だな……：：：ダナ星人は好戦的だ、怪しい！」

ボルダナ「（動揺）な、な、何を馬鹿な……

……！」

高乃「待って下さい！ ボルダナさんはずっと

と私達と一緒にいました！」

パテル「その通りです。彼はトイレでも私と

一緒でした」

ジグ「貴様はシュミ星人か……あのヒガン星

人とは違い友好的な奴らだな！ ふん、アリバイ成立か。運がいいなダナ」

頬を奮わせ、怒りに耐えるボルダナ。

高乃「（杉葉に）ひどい他星差別刑事ね！」

杉葉「（真剣に）……そうだな」

ペオは動じていない。

ジグ「（ドリーユを睨み）残るは貴様だなガ  
ルアン星人！」

ドリーユ「お、俺はコカ星人ダ……」

ジグ「（無視）貴様、アリバイはあるか！

単独行動をしてはいないか？」

ドリーユ「俺は……トイレに行っただけ……」

ジグ「一緒にいた者は？ 何階のトイレだ？」

ドリーユ「一人だッタ……トイレは、さ、三階ダ……」

ジグ「ガスが検知されたのは三階のトイレ付近だ。貴様、随分健康そうだな！」

ドリーユ「ウ……」

ジグ「（不敵に笑い）これは、少々絞らせて貰う必要があるそうだ」

ジグが合図をすると二人の警官がドリーユの両手を掴む。

ドリーユ「（怯え）違ウ、俺はテロなんて！」

高乃、ドリーユの前に出ちはだかる。

高乃「こんなの横暴すぎます！ 一添乗員ツァーリーダー

としても許容出来かねます！」

ジグ「テロは許してはならん犯罪なのだ！

地球人のくせに異星人を庇う気か！」

高乃「そういう問題ではありません！」

不安そうに立ちつくすボルダナ、パテル。

杉葉の声「お待ち下さい、宇宙刑事殿」

ジグ「（振り向き）あん？」

端然と腕組みをして立つ杉葉。

高乃「十日……」

ジグ「貴様も文句があるのか」

杉葉「高乃の言うとおりに、捜査が強引すぎやしませんか。現場のトイレにいたというだけで犯人扱いとは」

ジグ「ガスが検知された階では、従業員や宿泊客が何人も気分を害して治療を受けているのだぞ！ 何故こいつは平気なのだ！」

杉葉「ガスの種類は何ですか」

ジグ「シアン化水素ガスと聞いている」

杉葉「その種のガスなら、効果が薄い肉体構造を持つ他星人は少なくない。ダナ星人にも殆ど通用しないはずだ」

ボルダナ「お、俺は犯人じゃないぞ！」

杉葉「ガスが効くがどうかは犯人である根拠とは関係ない、というだけです」

ジグ「貴様何者だ？ 宇宙探偵か」

杉葉「しがないトイレ職人ですよ」

ペオ「ペオはアシスタントです」

ジグ「トイレだと……？ たかがトイレ職人

が生意気に意見するか！」

杉葉「仕事柄、他星の文化を日々研究しているもので。お役に立てると思えますがね」

心配そうに二人のやりとりを見ている高乃やパテル達、ドリーユは捕まえられたまま挙動不審。

ジグ「ふん、ならば役に立ってみる。何も出来なければ貴様もテロリストと見なす」

杉葉「高乃、あのファイルを見せてくれ」

高乃「へ？ あ、うん」

高乃、ドリーユらの個人情報リストを挟むんだファイルを、杉葉に手渡す。

杉葉「うむ……ガルアン星では無くコカ星だったな。ドリーユさん」

ドリーユ「な、何ダ？」

杉葉「貴方の母星について聞かせてほしい。

コカ星の環境は、地球とどう違う？」

ドリーユ「エート……コカは陸地が少ない」

杉葉「海が殆どということですか、それとも」

ドリーユ「海よりモ……星を満たすのハ気体

ダ。我々の主な生活圏は空であるカラ」

杉葉「食生活はどうでしょうか」

ドリーユ「主に若い木の実の種子を食べる。

それと石も食べる。地球では鶏冠石などと

呼ばれるそうだが」

ボルダナ「ケツ、てめえも石を食うのかよ」

ドリーユ「何でモ食うわけでは無い！」

杉葉「（深く頷き）大体分かった。高乃」

杉葉、ファイルを高乃に投げ渡す。

高乃「（受け取る）は、はい」

杉葉「コカ星からの旅行者を扱うのは、セ

レスティアル社では初めて——というより、

地球に来到ることで初めてなのでは？」

高乃「……そういえば、上司から聞いてたか

も。初めての客だから丁重に扱って」

杉葉「地球と交流が無かった星の者が、突然

テロに手を染めるものですかね、刑事殿」

ジグ「む…：同系統のガルアン星人は何年も前から地球に来ている」

杉葉「似ているから何だと？ そんなことは

問題じゃない。要はコカ星人の文化を、

我々が把握していないということだ」

パテル「それがどうテロと結びつくんです」

杉葉「文化を知らないということとは生態を知らないということ、つまりEEMとトイレの構造を皆が知らないということですよ！」

一同、呆然。

杉葉「食事の時に気づくべきだった。恐らく

彼らは、若いウメの美や鶏冠石から、微量

なシアン化水素を取り込んでいたんだ」

高乃「毒ガスを取り込む?!」

杉葉「リンの代わりにヒ素をエネルギーにする

生物は地球にもいる。コカ星の生物も同様、

エネルギー源が我々とは異なるのさ」

杉葉「そう、別段珍しいことではない。そして

コカ星人は不要なシアン化水素ガスを、

EEMとして排出するのだろう」

ジグ「毒ガスを食って出すという訳か！ 生物

兵器では無いか！」

杉葉「地球人のEEMだって、処理方法を間違

えば人を殺す。中世期、EEM対策を退化

させた地球人は、疫病の蔓延を招いた」

× × ×

冒頭と同じ、二十年前の荒廃した町。

杉葉のN「あの戦争のとき、俺が住む町のラ

イフラインは滅茶苦茶だった」

やつれながらも立っている杉葉と高乃が

何かを見ている。

杉葉のN「衛生状態も最悪で、俺は自分達の

EEMにまみれて死を覚悟した」

二人の視線の先には、公共トイレや水道

を建造している工事業者の人間達と、

彼らにてきばきと指示しているウツサ。

高乃「すごいね、おじさん」

ウツサ「（笑み）人の尊厳はトイレから、だ。

今戦ってるヒガンの奴らだって同じだ。ト

イレの道は全てに通ず！」

杉葉「（憧れの瞳でウツサを見つめ）……」  
ウツサ「（杉葉達を見て笑み）待ってる、風呂も作ってやる。医者もすぐ来るからな！」

杉葉「俺達を助けてくれたのは、一人のトイレ・マイスター……彼が力を尽くして設備を整えてくれたおかげで、俺は助かった」

高乃「（思い出している）……」

杉葉「正しいトイレ設備があれば、EEMは無害だ——ペオッ！」

ペオ「はい、マイスター」

ペオ、突然白衣の前を開ける。

その腹部は、ipad的なタッチパネル式ディスプレイになっていた。

杉葉「トイレは人の尊厳を救う。トイレを知れば宇宙が見える！」

杉葉、凄まじい指さばきでペオの腹に、何やら図面を描いていく。

ペオ「（黙って杉葉を見つめて）……」

高乃「（呆れ）あーあ、始まった」

パテル「何をしてるんです彼は……？」

高乃「見ていれば分かりますよ」

杉葉「よし、完成だ！」

ペオの腹部画面に、正確無比なトイレの図面が。

杉葉「電送せよ、ペオ！」

ペオ「了解。ゲートオープン。本部工場より量子DL・質量変換」

ペオの腹部が強く発光、光の中から図面通りのトイレが徐々に出現。

驚愕している一同。

高乃「思いついたらその場でトイレ考えて、

その場で完成させちゃうんですよ、十日は」

杉葉「ユカ星人仕様の、オリジナルトイレ

だ！  
神秘鳥カラドリウスレストとでも名付けようか」

ドリーユ「我々のトイレ……なのカ」

杉葉「宇宙船用トイレ並の強力な吸引機能でガスを逃さずシアン化物イオンを、酸化剤で一気に分解する。毒性など残らない」

ドリーユ「（感動）お、おオ……！」

ジグ「ト、トイレを作ったから何だと言う

んだ！ それにそいつらがガスを出すことを知らなかったのは、貴様等の過失だぞ！」

ジグ、高乃を高圧的に指差す。

高乃「（怯みながらファイルを開き）うっ……でも、検査も受けたはずですし、申請されたリストには何も……」

杉葉「リストには、コカのEEMはガルアンと同種と記されている。これは申請時の記録ミスか、虚偽の申請を出したか——」

ドリユー「う、ウソなド吐いていないゾ！」

杉葉「——何者かが、申請書を改竄したか」

ジグ「ぬ……?!」

杉葉「調べるというのなら、そこまでの可能性を視野に入れることだ。徹底的に客も含めてこの旅行に関わった者達を」

ジグに見回され、高乃、パテル、ボルダナの顔に緊張が走る。

ジグ「そういうことか」

高乃「ちよつと十日、容疑者が広がってるじゃない……!」

杉葉「潔白を証明すれば良いことだ」

高乃「そう簡単に言われて——もっ?!」

そのとき高乃の背後から、二つの腕が。パテルが高乃を羽交い締めにして、首筋にナイフを突きつけている。

パテル「調べるまでもねえよトイレ野郎」

愕然とパテルを見る、ボルダナ達。

杉葉は毅然とパテルを見据える。

ジグ「貴様、まさか……!」

高乃「ばばば、パテルさん？」

パテル「おっと、下手に動くんじゃねえぞ。

地球人相手に容赦はしねえからな」

ドリユー「お前が私を陥れたの力！」

パテル「そういうこつたトリ野郎。書類を改竄して、EEM対策を行わせない——これだけでテロを演出出来るんだ」

ジグ「シュミ星人とは友好的な関係を結んでいるはず! 何故このような真似を!」

パテル「俺はシュミ星人なんかじゃねえ」

パテル、片手で自分の顔の皮を引っ張る。ずるずると皮が剥がれ、中からぬめぬめした緑色の皮膚と、黒目の無い顔が。

ジグ「その顔……ヒガン星人か!」

ボルダナ「ヒガンって、確か地球人と何年

も戦争してた奴らか！」

パテル「そうさ。休戦なんて言っちゃアいるが、納得いかずに戦う連中はまだまだいる。俺もその一人だ」

高乃「（怯えながらも怒り）自分達のために、他の星の人間を利用するなんて……！」

パテル「未開の星の毒グソだぜ。先を往く者オーバーロードが利用してやるんだから、ありがたく思っ  
てほしいがな」

ドリーユ「（悔しそう）ぐぬヌ……！」

パテル「仕方ねえのさ、地球と俺らじゃ文化が違いすぎた。文化が違うってことは見る宇宙が違うってことだかん」

杉葉「その通りだな」

パテル・高乃「……？」

杉葉「宇宙をどう認識するかは、星によって違う。だからこそ俺達はその違いを知り、様々な宇宙を認める」

パテル「奇麗事を……」

杉葉「（激昂）俺達はトイレを作り、無限の宇宙を知る！ トイレを汚す奴は、トイレマイスターの俺が許さんツ！！」

杉葉、懐から何かをパテルに投げつける。咄嗟に手で払うパテル、それは杉葉が持っていた塩の紙包み。

パテル、破れた中身の塩を、頭から被ってしまふ。

パテル「（もがき苦しみ）これはまさか？」

高乃、隙をついて逃げ出す。

杉葉「塩化ナトリウム——ただの食塩だよ。体の90%以上が水分のヒガン星人には、どんなEEMより猛毒だろう」

ジグ「よし、今の内に手柄を……！」

パテルを捕らえようと前に出るジグ——その刹那、飛び出したペオがパテルの首を掴み、あっさりとねじ伏せる。

ジグ「あれ」

ペオ「状況終了」

#### ■ホテル・高乃の部屋（深夜）

シングルベッドや家具など、広い室内。高乃、ぐったりとベッドに腰掛けている。

傍らのソファには、杉葉とペオが。

ペオ「お疲れさまです、高乃様」

高乃「ありがとうペオ。こっちいらつしやい」  
言われるがままに立ち上がるペオ、高乃の隣に座る。

高乃は無遠慮に、ペオの膝に頭を預ける。

高乃「ふふふ、文句一つ言わないしロボット  
って最高」

杉葉「文句があっても、プログラム上、口に  
出来ないだけだ」

高乃「何よ、人がくつろいでるのに」

ペオ「ペオは高乃様に敵性意識を持ちません」  
高乃「だってさ」

杉葉「仲がいいことだな全く…：ボルダナさ  
んとドリーユさんはどうしている？」

高乃「二人とも、警察の聞き込みに疲れてぐ  
っすり休んでるわ。ドリーユさん用のトイ  
レも、ホテルが早速設置してくれたみたい」

杉葉「（得意気）やはりこのホテルはサービ  
スがいい。銀河旅行時代のお手本のようだ」

高乃「あのさあ十日…：貴方ひよっとして、  
パテルさんが真犯人だって分かってた？」

杉葉「何故そう思う？」

高乃「（体を起こし）最初からドリーユさ  
んを疑ってなかったし。パテルさんが本性  
見せたときも、眉一つ動かさなかったじや  
ない」

杉葉「…：あのパテルという男は、食事中も  
殆ど水分しか摂っていなかった」

夕食中、水ばかり飲んでいたパテル。

杉葉「水を重要な栄養素として摂取し、水分  
を奪う塩などを避けるのは、ヒガン星特有  
の食文化だ」

高乃「そっか…：食欲無いだけかと思ってた」

杉葉「それにパテルは、食後にボルダナさん  
と一緒にトイレに行っていた」

ボルダナと、トイレに向かうパテル。

杉葉「あの階のトイレは全て、ダナ星人用だ。  
ワンフロア丸ごとダナ星人用に作られてい  
るからな」

高乃「なのに、パテルさんは同じトイレの話



をしていた……」

杉葉「ダナ星人用の温水洗浄は、レアメタルのEEMを洗い流すために、高圧で大量の水を使う」

高乃「私達やシユミ星人には刺激が強すぎるけど、ヒガン星人なら耐えられるってことね。トイレだけで全部分かつちやうのね」

杉葉「分かることと、疑うことは別だがな」  
苦々しそうな杉葉。

高乃「（苦笑）誰も犯人にしたいくないのよね、十日は」

そのとき、杉葉の胸元で着信音が。

杉葉、極薄カード型の携帯電話を取り出す。

携帯の画面を見て、顔面蒼白。

杉葉「（出て）はい！ ……ええ、何とか解決です。うう、すみません。時間がかかりすぎですか、はあそうですね……」

杉葉、電話を持ったまま頭を下げている。にやにやとその様子を見つめる高乃。

杉葉、緊張を解いて電話を切る。

高乃「今の、あの人でしょ？」

杉葉「そうだ、伝説のトイレマスター……」

……ウツサ・メイン」

高乃「（愉快）絞られてるのね、相変わらず」

杉葉「俺はあの日を忘れはしない。恩を返すためにも、俺はトイレを作り続ける」

杉葉、立ち上がってペオの手を引く。

杉葉「帰るぞペオ、仕事だ。新しいトイレの発注依頼が来ている」

ペオ「（立って）はい、マスター」

高乃「忙しい仕事ね、もっとゆっくり過ごせばいいのに」

杉葉「お前こそ、人同士を繋ぐ力になろうとその仕事を選んだのだから。敢然と刑事に立ち向かう様は……なかなかだったぞ」

高乃「……十日もなかなかだったぞ。仕事頑張る。必ず地球で待ってあげる」

杉葉「（背を向けて）ああ。それまでに痔を治しておけ」

高乃「（真っ赤）……！ さ、最低ッ！」

杉葉、背中であんなながら、ペオと一緒に高乃の部屋を出ていく。

■ 同・廊下

顔を赤らめて歩いている杉葉、ペオ。

ペオ「マイスター、脈拍が早まっているようですが」

杉葉「気のせいだ。帰る前にトイレに寄る」

ペオ「はい、マイスター。火照りを冷ましてくることをお勧めします」

杉葉「う、うるさい、そこで待ってる！ これだから、トイレに入らないロボットは」

杉葉、頭を掻きながら廊下奥のトイレに入っていく。

ペオ「やはり、人間の不便さは良いものです」

ペオの差し込みプラグ、ご機嫌そうに大きく揺れている。

了